

海岸浸食が進む戦争遺構 ・落石三里浜トーチカ (小型要塞)



根室市外三郡医師会
根室・中標津保健所

いとうのりひこ
伊東則彦

根室共立病院

すぎきひろゆき
杉木博幸

【位置アクセス】

根室半島南西部の顕著な戦争遺構・落石三里浜トーチカ {堡塁 (ほろい)・小型要塞、特火点 (陸軍用語)} についてご紹介。

JR徒歩；JR根室駅からはJR落石駅経由、往復5時間。

車・レンタカー；釧路駅前から130km (片道)、往復6時間。

《徒歩3時間》

①JR落石駅から②落石港外浜 (入口) まで3.3km (徒歩40分片道・南西方向)。次に外浜から③三里浜 (砂浜) に沿って西北西へ約2.5km (徒歩35分片道・西北西方向、悪路)、砂浜なので足を取られ比較的歩きにくい。足裏が数cm埋まる、めり込む箇所多々。強風向かい風、横風有り、長靴、登山靴など推奨。速歩、ランニングは難儀、体力消耗し易い。途中で飲水湧き水箇所は皆無で、夏場は脱水にも注意。

《四駆車45分間》

三里浜は幅50m以上海浜で四駆車走行可 (二駆車は推奨せず、JAF救援も念頭)。ただし、徐々に幅が狭くなり半ばより30m未満になる。特にトーチカ箇所は、海浜幅10m未満。車体への波浪掛かり腐食に留意。海岸浸食が進行中、柔い泥濘 (ぬかるみ)、埋没 (スタック) 箇所可能性有り。海岸への漂着物 (木材廃材、プラスチック漁具大型、海藻類) 多々、衝突、巻き込みで走行注意、徐行推奨。手前の幅が比較的広い箇所、または砂地が比較的固い途中駐車可。

特に悪天候下、徒歩、乗車時共に、強風波浪、低気圧高潮が予想され、波飛沫掛かり、波浪直撃と引き込まれ、離岸流流され可能性若干、慎重な対応を要す。



(根室半島の付け根、国土地理院地図)

【背景】

《対アメリカ軍とソ連侵攻》

第二次大戦時終盤・日本軍退潮期、当初、アリユーション、千島からの米軍反攻を念頭に、昭和19年 (1944) 4月より根室半島トーチカ群が陸軍によって建設、1年間程利用された。広島長崎原爆投下後、日ソ中立条約破棄、日本敗戦直前昭和20年 (1945)



(根室落石岬の北西側・三里浜、国土地理院地図)

8月9日ソ連対日参戦、及び満洲国奇襲、8月11日南樺太侵攻が有り、対ソ連兵揚陸防衛も任務。以降、北千島・占守島 (8月18日) 激戦、択捉島 (8月28日)、色丹島 (9月2日)、国後島 (9月3日)、歯舞群島 (9月4日) と不法占拠。

【現況】

《最前線での玉砕覚悟》

頑丈なコンクリートで内側は木材が残っており、内装はコンクリート剥き出しではなく板張りと思測される。内部は、八畳以上の主室と脇部屋が少なくとも2部屋両側に配置されていた。収容人員は守備隊歩兵他5名~20名程度の憶測。ただし、海浜親潮にて、寒冷多湿及び強風波浪多々で、居心地の良い兵舎には感じられず。冬季等半年は暖房要す。水源の確保も落石港漁村からの往復となり、人力のリヤカーか馬車を使っていたのではと想像。トラックも可であるが、敗戦前極度の石油不足と悪路砂地なので多用汎用はしにくかったと思われた。

《揚陸迎撃》

仮に米軍またはソ連軍が揚陸敢行の場合、トーチカは海岸部最前線のため、揚陸艦ハッチ・昇降口開口直後からの激戦が想定。数で勝る米兵ソ連兵が雲霞の如く、砂浜から崖、丘陵へ殺到前進するので、トーチカ守備兵は全員戦死、玉砕見込みで、砲銃撃、手榴弾、または火炎放射器にて死ぬ覚悟は常に持っていたと思われた。

《滅失の懸念》

異常気象下、海面上昇、海岸浸食で波浪がこのトーチカ (小型要塞) にも間断無く被っている。十年前の訪問時より海浜幅が半減、及びコンクリート外壁の崩落、ヒビ割れ、要塞本体の砂浜への崩落、斜めずり落ち、滑りが一段と悪化して来た様に感じた。特に低気圧の強風波浪時、高潮時は波力による劣化、破壊が進んでいると推測。今後、数年から数十年にかけて、本遺跡は消失、滅失する懸念。



(下部砲座は頻回波浪浸水)

【結語】

根室半島の象徴的戦争遺構・遺産である本トーチカに係る消波ブロック、護岸土木工事等保存策が必要と考えた。